長男の幼稚園入園前

杉本　裕子

長男が四歳になった。三歳の時にはまだ毎日を親子水いらずでというか、私自身子供と一緒にいることを楽しみたくて、近所の幼稚園を調べてみることもしなかった。幼稚園は義務教育の場ではないから、四歳であろうと五歳であろうと行かせても行かせなくてもいいはずである。この先五歳で一年保育ということも、六歳からの義務教育までは家庭でということも、その子その子にあわせて自由に選べるはずなのだ。ところが息子が四歳の春を迎えるという段になって、私は急に落ち着かなくなってきた。今の日本の社会ではたぶん多くの人が、子供が遅くとも四歳になると、幼稚園ないしはそれに類する場に子供を送り出しているように思う。実際の統計的な数字はどうなのか調べてもいないのだが。ただ、私達の身の回りでは、午前中近所の公園から三歳以上の子供はほとんどいなくなる。天気のよい日、朝から張り切ってお弁当まで用意して、おもいきり子供達と一緒に遊ぼうと思って家を出ても、長男の仲間達はみんな幼稚園に行っていて、公園に出てくるのは赤ちゃんたちばかりで

ある。私も下の子から目が離せないので、お兄ちゃんは結局一人で遊ぶ。退屈そうな彼の横顔を気にしながらも、十分一緒に遊べないで午前中を過ごすことが多かった。お昼ごろ幼稚園バスが公園のわきにつき、仲間達が帰ってくると、息子の目の輝きが急に変わる。そういうこともあって、そろそろ幼稚園に行かせたほうがいいのかなと、何となく思ってはいた。幼稚園を一年〝猶予〟しただけでこんなに仲間不足に見舞われた。だからもう潮時だというような、そんな感じである。そしてそう思えることは、時流にのった、あるいは常識的な生活をするうえで私にとって何の不便もないから、そのまま幼稚園入園に向けて突っ走っていけるはずだった。でもなぜかそうすることができなかった。

私はどうして子供を幼稚園に行かせようとしているのだろう？　幼稚園とはどういうところなのだろう。四歳になった息子にとって、幼稚園は本当に毎日の生活に欠かせないところなのだろうか。幼稚園に行くというのが社会的慣習だから、行かせようとしているだけなのだろうか。新聞やテレビ、雑誌などでは、乳幼児からの早期教育が大流行であると伝え、とくに幼稚園の園児募集が始まる季節には0歳以前、すなわち胎児期からの学習塾があることを特集を組んで報道している。私はそのことを詳しく調べてみたことがないので、実際にはどのくらいの親や教育者たちがそのような超早期教育に積極的な関心をもっているのか知らない。それにしても二歳から体操教室や幼児教室などに参加という話は、私の身の回りでもよく聞く。そういう現代なのに四歳にもなった子供の、しかも今や行くのが当たり前と思われているらしい幼稚園入園に関して、いったい何を迷っているのかと不思議がられるかもしれない。でもやっぱり私には何かしら心のそこに不安があって、絶対行かなきゃいけないのよと子供に言うことができないのだ。

私も何も考えぬまま、長いものに巻かれていくのだろうか。いや、巻かれていくのは子供の生活だ。何も考えようとしない私の怠慢で、いたずらに子供の時間を混沌

に陥れてしまうようなことはしたくない。でも私がそう意気込む一方で、ビジネスマンとして今、社会のまっただなかで働いている父親や祖父は、子供が幼稚園へ行くべきであると疑いもしない。私が、どうして幼稚園に行かせなきゃいけないのかしらねとつぶやいただけであわてふためいてしまうのだ。私が子供と一緒に家庭に閉じこもり、母親である自分の手元に子供をいつまでも包み込んでおきたいのかと懸念しているらしい。そうして子供が社会のなかに溶けこめない存在になることをとても心配している。そういうわけではないと私は自分では思っている。初めて子供を手放す不安は確かにあるけれども、それよりも幼稚園は、あなたが仲間のとも君やさとる君たちと夢中で遊んでいる時間、そういう時間の固まりのようなところなのよ、と確かな見通しをもって子供に言いたいのだ、しかし私の夫や父のように、幼稚園は社会への適応を訓練する最初の場だと、そう考えている人が多いのではないだろうか。そして実際は、今幼稚園は子供にとってどういう場なのだろうか。

以前私が保育の勉強をして保育の実習を重ねていたときには、子供が幼稚園にくるのは当たり前のことだと思っていた。子供を幼稚園に送り出す親のことは考えてみたことがなかった。倉橋惣三の著書を読んでいると、本当にこういうふうに保育のことを考え、目指していくなら、幼稚園で子供は「自己充実の一杯に出来る自己の天地を持ち得る」だろうと思いをこめた。

でも今度は母親として、子供を送り出す幼稚園を具体的に選ぶ時、毎日通うための外的な条件の合うところが、必ずしも子供自身によるそういう生活の実現を第一とはしていないかもしれないのだ。私が実際に資料を集めた二、三の幼稚園ではこんな感触だった。たとえば、入園案内に「集団生活のなかで大切なことは約束です。約束が守れるかどうかでよい子か悪い子かそれとも強い子か弱い子かがわかります」と書いてある。入園願書には「（そのこの）なおしたいところ」を記入する箇所がある。親子面接には、親は二階で保育者と面談、子供は

一階のホールで遊んでいるところを保育者により観察される、というものであった。ちなみに面接の日、私は身体の具合が悪くて一緒に行けなかった。後で父親からきいたところでは幼稚園の門を入るところからすでに怯えていて、息子は父親にしがみついて離れず「パパと一緒にいる！」と泣き叫んでいたらしい。父親が困って一生懸命いいきかせようとしていると、幼稚園の先生がやってきて息子を後ろから抱え込み、「お父さん、大丈夫だから二階に行ってください！」といって引き離してくれたという。

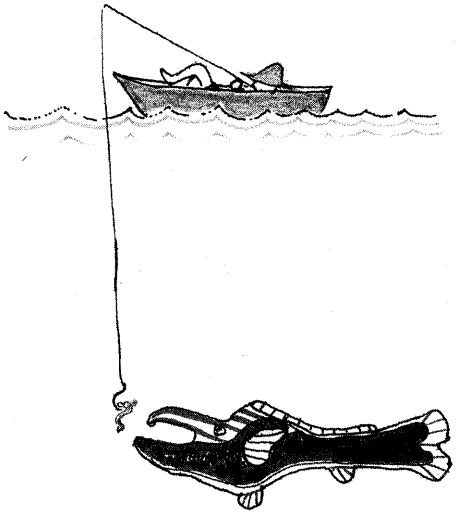
私がこれまでに触れたのは、限られた範囲からの小さな、数少ない事実にすぎない。そんななかからいかなる結論も引き出すわけにはいかないが、薄々感じさせられてしまったことはある。それは大人社会からの圧力を幼稚園もふせぎきれないでいるらしいということだ。社会は、ここに参加したいならこれこれの条件を充たせ、と要求してくる。でも、その要求を子供が育っている世界のなかにそのまま受け入れてしまっていいのだろうか。子供が大人に求めてくるもの（大人がそれに気が付くかどうかはまた別の問題だと思うが）に比べてそれほど社会の要求というものが絶対的・普遍的に、常に意味あることとは私には思えないのだ。社会に参加し、貢献していくことばかりを偏重しているとしたら、子供の育ち、つきつめれば人間についての誤解に由来する、子供に対する大人の怠慢がありはしないだろうか。大人が担っている部分だけが世界のすべてではない。主権・在・大人は、ある限られた場に於いてのみ言えることなのではないだろうか。

私の夫や父にそういうことを話してみても、私がいったい何をそんなに苛立っているのかと訝しそうにするばかりである。今の日本の社会を自らの責任をもって担っていると自負する人たちであるから、その社会に参加すべく、幼少のころから努力するのは当然のことだと思うのかもしれない。

じゃあ、と、人間理解についてまで広がってしまった

私の疑問をひとまず押さえて、たとえば、「集団生活の約束を守れるかどうかで云々」という一文について。これはつまり、構成員の個々はともかく、集団の健全な維持・運営こそがこの園の第一目的であると、だから皆さんはこの園にくる以上、約束の守れる子供にならねばいけないのですと、私にはそう聞こえてしまうのだが。それはひねくれすぎているとしても、集団そのものに愛着を持ち、集団の歩調を乱すような行いは自制するというようなことが、三・四・五歳くらいの幼児の全身・全時間を貫き、生命力を増進させるような喜びの体験になり得るのだろうか。幼稚園とは、集団生活であることにおいてのみ、意味があるのだろうか。

また、保育者がまだ出会っていない子供の「なおしたいところ」を知ろうとするのはなぜか。この子供の保育をはじめる前に、そういうことが情報としてどういう意味を持つのだろうと、不思議に思う。私ではない、他の保育者と新しく出会う時、子供にとっては新しい関わり方・関わられ方を体験するチャンスである。それなのに「なおしたいところ」という一方的な情報を大人同士が伝達しあい、身構えて待っているとしたら、子供はますます身動きとれなくなってしまうだろう。大人がある言葉にとらわれてしまう時、本来は自分も子供も揺れ動



き、躍動し、変容する存在であるというお互いに対する信頼が鈍り始めるからだ。子供との関わりのなかで自分がどう感じたかというのは、それはそれで素直に受けとめていこうとは思っている。でも、自分のなかでじっくりと抱いてこなれて解けていくまで慎重に話したいと思う。そんなに簡単に人に話せることじゃないと思う。だから私には書けなかった。

そして面接のしかたについて。息子の場合、二十人ほどいた子供達のなかで、親から離れられなかったのはひとりだけだったそうだ。二十人に一人いるかいないかの子供のために親の面接と、子供の遊び方を観察する場を同じ部屋にすることはできなかったのだろうか。息子のようなケースはきわめてまれであると考えられているのだろうか。それほどの狭き門とは思えないのだが。何かそこに技術的・具体的な障害があって止むなくそうしたのか、それとも親と引き離した状態での子供を観察する必要があったのだろうか。でも、いっしょの部屋でスペースを分けるというそれだけの配慮で、子供が親のいることを自分で確認できるというそのことだけで、事態はきっとだいぶ違ったはずなのだ。しかし夫は、そんなに甘やかすことはないというのだ。つまりそんなことではいつまでたっても社会のなかではやっていけないよ、と。どんな子でも安心して遊べるように配慮することが、果たして甘やかしなのであろうか。そういう配慮をしないのはむしろ大人の側の手抜きにすぎないのではないだろうか。大人が自分で動くより子供を動かすほうが容易だろう。

この頃の子供は喧嘩の体験が少ないから、大きくなって喧嘩したときに傷害事件を起こしてしまったりするのだという話を聞いたことがある。だから小さいころに喧嘩もまた十分させるべきだと。一方、私が幼稚園の実習をしていたときのこと。ベテランの先生が、実習生が園庭への出入口に出しておいた靴箱の位置をなおしておられた。そばにいた私につぶやくように「靴を取りにきたときにぶつかったり転んだり、そんなつまらないことで喧嘩にならなくてすむようにね」といわれた。子供達が

毎日を一緒にすごす大人たちのなかに、どれくらい、一人一人どの人も満足して生活できるようにこまやかに心と身体を使う人がいるか。生活のなかの色々な場面、そのすみずみに、そのための無言の配慮・くふう・知恵がどれだけ生かされているか。そういうことこそが、子供の人間としての成長の芯を育むのではないだろうか。

入園前の年の十月から十一月にかけて、私達は幼稚園とこういう出会いをした。

家庭の外に出たのは親子共に初めてだったから、社会からの圧力などという感じ方をしたのは仕方なかったのかもしれない。慣れてしまえば、これくらいは当たり前よ、といって気にもとめないでいるかもしれない。ただ、心にひっかかったことを単に世の中の風として一時こらえて受け流すのではなく、もう少し立ち止まって考えてみたかった。

異文化の共存共栄は、現代の世界的な課題であろう。どの文化もどの国も、どの民族もどの人も、もはやお互いに排しあっていると、現実に地球という星が破壊されていく。

子供の世界は大人の社会とは異質な領域である。力関係の強弱によって一方から他方への侵食が行われるとき、やはり人間という存在自身が破壊されていくだろう。子供が十分子供であることができず、その結果十分育つことができなかったら、どんなことになるだろう。せめてせめて、就学前の子供達が集まっている場では、大人の社会が無造作に押しつけてくるさまざまな要求を、そのまま子供に差し向けてしまわなくていいように、慎重に吟味し検討していく緩衝機能があってほしい。そういう働きをするためには、本当に成熟した人格を獲得している、あるいは少なくとも目指している人であることが必要であろう。子供の世界に身を置き、そこが驚異と感嘆、不思議に充ち満ちていること、ここにもまた人間学への入り口があることを感じている人。そして同時に、大人たちが構成する社会においても、責任を

はたしつつ自分の目的を見いだしている人。つまり人間の叡知の結集を必要とする役割なのだ。ずいぶん大げさに聞こえるかもしれないが、たとえば「ちび黒サンボ」の絵本の問題ひとつをとってみても、そんなに外れてはいないだろうと思うのだが。……あぁ、私には程遠い、のは事実だが、でもそれはまさに保育者の働きなのではないだろうか。家庭の果たす機能であり、幼稚園・保育園の果たす機能であろう。

しかし私はこれらのことをまだ幼稚園のどの保育者とも、他の子供達やその親たちとも出会う前に、ひとりで頭のなかだけで考えている。だから私が今抱いているいくつかの疑問も、個々の幼稚園を非難しようとして考えすすめているわけではない。こんなことは、現場の保育者たちにとっては何も新しいことではなく、毎日の保育のなかで度々ぶつかっていることであろう。子供達にとってどんな保育がいちばんいいのか、汗を流し腰を痛め、心を砕いて働く人たちにとってはもっと切実であろうと思う。

私は母親であるのに、いや、あるからこそ？　自分が保育者であるということを忘れてしまう。ただ、生活を滞りなくおくるべく、家庭を管理することばかりに気を取られていることが多い。だから、子供と共に幼稚園に出会うとき急にまた、私も保育者に他ならないのだと思いかえす。幼稚園の保育を考えることは同時に、母親としての自分の保育を考えることであるのだ。

幼稚園とは子供にとって今どういう場なのか、考えてみてわかるというようなことではなかった。まずは私たち自身にとっての意味が大事であるとすれば、それはやはり具体的に出会って、関わっていくなかで見いだされるものであろう。確かな見通しはまだ持てないでいるが、でも「行ってみようよ」と息子を誘ってみたい気持ちにはなっている。

（はるにれの会）